



森 隆二さん

私が担当したのは昭和56年4月から58年5月までで、交通安全と統計も兼務していました。当時、北檜山町史（初版）の編集最中であり、編さん委員への資料の持ち込み、広報紙の作成と忙しい毎日であったと記憶しています。

私も広報紙を手掛けたのは初めてで、一見簡単そうに思ったことが最大の失敗でした。四月号は当初予算を一面トップで紹介するのが通例であり、安易に図案化したイラストを利用して見やすく親しみやすい広報紙にしようと大それた試みをしたこと事態が素人の恐ろしさで、初版から非常に苦労したことが鮮明に思いだされます。

町史の発刊にも泣かれました。元助役岩原克志氏の全面的なバックアップを得て発刊に到ったものの編集責任者の記述内容に間違いが多く、印刷を差し止め、校正につぐ校正で発刊が一年遅れとなりました。今考えてみると、広報紙の発行より町史発刊が最重要課題として位置付けられていました。従って、広報紙は合併号のオンパレードであり、このような広報紙は最初で最後だと思います。

いずれにしても、広報を担当した者でなければ味わつことのできない経験をしましたが、完成した時の達成感とは別に、文章を書き他人を理解させることの難しさをあらためて痛感しています。



第400号（平成11年8月号）

表紙は天皇・皇后両陛下御来町記念のカラー写真となっています。サイズはA4版。（表紙にカラー写真を使用したのは平成2年1月号が初。以来毎年1月号の表紙はカラー。A4版サイズは平成8年4月号から）



第300号（平成3年4月号）

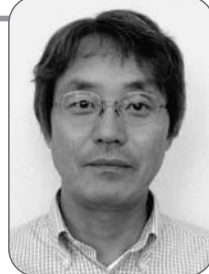
発行300回を記念して広報に対する町民の声を載せています。太櫓中学校の廃校と左股小学校の新校舎完成の記事が掲載されています。（表紙の題字がひらがなになったのは昭和63年4月号から）



第200号（昭和57年11月号）

「11月11日、待望の温泉が出た。77度で毎分380ℓ自噴。」の記事や町表彰式、第20回町民文化祭の記事が掲載されています。

※9月より広報紙は「広報せたな」となり毎月第4週の木曜日の発行となりますので、よろしく願います。



三浦孝史さん

私が広報を担当させていただいたのは、平成4年4月からの4年間で、作文は大の苦手としていたため「困ったことになった」と困惑した覚えがあります。

駄文のため読んでもらえない広報紙の出来でも、前任の二人は二年で卒業していったことから、開き直って取り掛かったものの、当時は原稿用紙に手書きなので読み直して添削を書き加えると、訂正や加入・削除が入り乱れ何がなんだか判らなくなるありさまでした。

原稿の締め切り間に合わせるのに何か良い方法はないものかと思案の末、思いついたのは、当時は職員の取り合いで、今は廃れたフープロで原稿を書くこと。フープロは、文字数と行数を決めた枠内に打ち込めば使用した行数が一目瞭然で、辞書を引くことなく漢字変換し、消しゴム要らずで、加入・削除もなんのその。「しめしめ」と一人悦に入ったことが改めて思い出されます。

思い出深い出来事は、南西沖地震で、深夜にカメラを持ち通行可能な道を探して大津波が去った太櫓海岸に辿り着き、甚大な被災状況を見て愕然としたことです。

9月からは「せたな町」になりますが、広報係がカメラ片手に伺った際は、これにも増してご協力くださるようお願いいたします。

広報紙で振り返る 北檜山町50年のあゆみ

北檜山町の広報紙も50年前の合併直後の昭和30年9月に第1号が発行されて以来、今号で473回の発行となりました。

当初タブロイド版であったものが昭和38年5月号からB5版スタイルに改版され、同40年には活版印刷から写植印刷となりました。今のA4版スタイルになったのは平成8年からです。

今回の3町の合併に伴い今回の広報紙が最終号となることから、広報を担当した先輩の思い出と、これまで発行された広報紙の移り変わりを皆さんにご紹介いたします。



第100号（昭和48年1月号）

100号の発行を記念し表紙の題字を変更。（大島安長さん書）
前年12月に行なわれた新成小学校の落成祝賀会の記事が載っています。工事費は校舎と屋内体育館を合わせて3,185万円。



第35号（昭和38年5月号）

38年度予算の特集となっています。一般会計の歳入歳出総額は160,305千円。特別会計と合わせて253,538千円です。
35号からはB5版スタイルに改版。



第1号（昭和30年9月号）

松谷與市町長の広報紙発刊に寄せる思いや、合併記念式典についての記事が掲載されています。サイズはタブロイド版で活版印刷。

広報紙のあゆみ



岩原克志さん

「広報きたひやま」も最終号となり、広報を担当した者として

は淋しい限りです。

当時（昭和30年）は、地元にあった地方新聞「道南タイムス社」で印刷をしていたが、編集も素人で、山田社長さんの指導を受けながら編集し、道南タイムスそっくりの紙面で、しばらくは写真などは入れずに道庁から来る凸版のカットなどでページを埋めていました。

苦い思い出としては、初めて手掛けた第二号を全国の広報紙クリニックに出したところ、見出しに「畜産功労者」と書くところを「畜生功労者」と書いていたのです。審査の講評で功労者の顔に泥を塗ったようなものとたたかれ、以来活字の重さを感じた次第です。

少しでも親しみを持ってもらえるようにと、出生・死亡のお知らせを掲載していたのに、時々休刊したため、この間のお知らせをカットして『遅くとも掲載して』とか、『お前が間違ってる』という苦情が寄せられ、こういうような情報を町民の皆さんが持っていること、広報紙が読まれているんだということに責任を感じました。

その後、道南タイムスが廃刊になり印刷所も代わりましたが広報紙づくりの中で責任を感じたことは、休刊や二か月合併号は絶対に発行しないこと、校正では誤字は徹底的にマークするということでした。